命と平和の重さ

沖縄県立開邦高等学校一年　大城　陽菜

「めっちゃグロすぎてうける。」
「まじきっも、やばいやん。」
これを聞いてあなたは、発言者が何についての感想を述べているか分かっただろうか。正解は、沖縄戦で犠牲となった少年の死相が記録された写真についての感想だ。この発言をしたのは、平和祈念資料館に修学旅行で訪れていた女学生だ。ちょうど私たちが平和学習でそこを訪れていた時の出来事だった。もう四、五年前のことだが、衝撃的すぎて今でも覚えている。人間の死をここまで軽々しい言葉で表すことができるのだと。少なくとも私は、臓物が飛び出し、生気のないあの眼差しに対してそのような感想は出なかった。

確かに、私を含めた今を生きる人間は死が隣り合わせという状況に置かれたことがない故に、命と平和といったものの価値が羽のように軽くなっているのかもしれない。しかしそれは、容認してもいいものなのだろうか。

沖縄県民である以上、幼い頃から沖縄戦を中心に、平和の尊さや、戦争の悲惨さについて学習する機会が多くあった。その学習のさなか、例の発言を聞いた私は疑問が浮かんだ。彼女たちのような、自分の距離のあるものに対して理解を示さず、滑稽だと馬鹿にする考えを持つ人が増えたら、先人たちの犠牲の上に成り立つこの平和は一体どうなるのか、と。真っ先に思い浮かんだのは、平和の崩壊、多くを巻き込み破壊し尽くす原子力の暴力が絶えない世界だ。近い未来、そのようなものを使わずとも、一瞬にして決着がつく兵器が完成しているかもしれないが。そしてまた、残酷に散った命に後悔を感じ平和の維持に努めるだろう。歴史を学べばわかるが、この世は争いと平穏の繰り返しだ。人間は、過去の出来事から学ぶことが苦手らしい。つまり、この様な人が増えていけば、沖縄戦と似た、もしくはそれ以上の惨劇が各地で数多く勃発するだろう。哲学者マルクスの言葉を借りれば「歴史は繰り返す」といったところだ。実に愚かしい。私たちには立派な脳みそがあるというのに学ばず、平和を浪費している事に気づかない。文面に表れているかもしれないが、私は怒りを感じている。あの学生の発言は戦死者を貶しているものである気がするからだ。

私の曾祖父は、曾祖母、祖父とその姉弟たちを残して戦地で散った。遺骨はみつかっておらず、祖父の家の仏壇の上に飾られる遺影のみが残っている。戦争で犠牲となった人の多くは未だに骨すらみつからずにいるだろう。それらを尊いものと捉えてほしい訳ではない。ただ、彼女たちが呑気に生きているのは、私の先祖を含めた、足元に積み上がる幾千万もの犠牲であることに気づいてほしい。あの戦争は沖縄の人間だけが亡くなったわけではない。もしかしたら、その中に彼女たちの先祖もいるかもしれない、と考えてもらえれば少しは自分事として捉えることができるだろうか。

私が件の出来事を体験し、現在に至るまで脳裏に焼きつく記憶として残っているのは、もう一つ理由がある。その平和学習が終わった後に、当時音楽の担任だった先生が、涙をこらえながら

「あんな発言をさせてはいけない。」
「あなた達にはもっとたくさん平和を学んでほしい。そしてたくさんの人に伝えてほしい。」

と訴えかけてきたからだ。その時、先生は怒っているようにも、悲しんでいるようにも見えた。普段は優しく面白い先生を、あの発言が傷つけたという事に対し、私は憤りを感じ今の今まで覚えていたのだろう。

あの発言は私の中の平和に対する考え方を見直すきっかけになった。この平和を途切れさせることなく、何世代にも紡いでいくには何が大切なのかと。それは、後世に伝え続けることだ。先生が訴えたように、沖縄戦を経験した先人たちの想いを私たちが、このように作文や写真、詩などの形にして残していくことが大切だと思う。七十八年前の出来事だからといって目を背けて、他人事と捉えてはいけない。それが平和を軽視する人たちの意識を変えるきっかけとなり、現在の平和を大切にするという考えに近づけるだろう。

毎年訪れる六月二十三日という日は、この記憶を鮮明に蘇らせる。現在も多くの自然や人々の命が失われ続け、平和にむけ進んでいる。代償をはらい手に入れたこの平和と自身の命の意味を軽んじないで欲しい。私は先祖や犠牲者の想いを背負い、たくさんの人に命と平和の重さを伝えていきたい。